

令和4年度
北大産婦人科同門会・WIND
学術講演会

プログラム

日時：令和4年12月17日(土) 午後2時00分より

会場：札幌パークホテル

札幌市中央区南10条西3丁目 TEL 011-511-3131

北大産婦人科同門会
主 催 北大医学部産婦人科学教室
一般社団法人 WIND

学術講演会「エメラルドの間」 3階 午後2時00分～5時00分

1) 学位取得者講演

座長 北大産婦人科同門会

会長 大久保 仁

「妊娠高血圧症候群における補体系の関与および 臓器障害の指標としての血小板減少についての検討」

北海道大学大学院医学研究院 客員研究員

日本学術振興会 海外特別研究員

眞 山 学 徳

2) 「教室一年の歩み」

北海道大学医学部産婦人科学教室

① 臨床統計

婦人科 病棟医長 遠 藤 大 介

産科 病棟医長 馬 詰 武

新生児 周産母子センター准教授 長 和 俊

生殖内分泌 産婦人科准教授 工 藤 正 尊

② 行事・会員動静

WIND 幹事長 金 野 陽 輔

③ 研究業績・学会・論文発表

婦人科助教 金 野 陽 輔

3) 特別講演

座長 北海道大学大学院医学研究院 産婦人科学教室

教授 渡 利 英 道

「医療と“遺伝子”と産婦人科の未来」

京都大学医学研究科 婦人科学産科学分野

教授 万 代 昌 紀 先生

「妊娠高血圧症候群における補体系の関与および臓器障害の指標としての血小板減少についての検討」

北海道大学大学院医学研究院 客員研究員
日本学術振興会 海外特別研究員

眞 山 学 徳

〔目的〕

HELLP 症候群の病態への補体の活性化の関与を検討する。妊娠高血圧腎症 (PE) における血小板減少症の意義について検討を行う。

〔方法〕

妊娠ラットに sFlt-1 および soluble Endoglin (sEng) を持続投与することで HELLP 症候群モデルラットを作成し、補体の活性化を検討する。PE における分娩時の血小板数 (正常群: >15 万/ μ L、軽症群: $10\sim15$ 万/ μ L、重症群: <10 万/ μ L) による周産期予後を検討する。妊娠初期からの血小板減少率 $>30\%$ をカットオフ値とし、血小板減少率と周産期予後の関連を検討する。

〔結果〕

sFlt-1, sEng の持続投与では血小板減少は認めず、HELLP 症候群モデルの作成に至らなかった。血小板減少重症群、減少率 $>30\%$ は周産期予後悪化のリスク因子であるが、軽症群ではリスクの増加は認めなかった。

〔結論〕

PE における血小板減少のカットオフ値は <10 万/ μ L が至適であり、血小板減少率 $>30\%$ は血管内皮障害の存在を示唆している。

「医療と“遺伝子”と産婦人科の未来」

京都大学医学研究科 婦人科学産科学分野

教授 万 代 昌 紀 先生

産婦人科は医療の中でもやや特殊な分野と見られることが多い。その原因は産婦人科の診療が母と子という2つの生命を同時に扱っていること、医療の影響が世代を超えて伝わり、にあると考えられる。すなわち、人間を含めた生物の根源的な欲求である、自己保存と種の保存、という時に相反する2つの欲求を同時に扱う、という医療における自己矛盾が産婦人科という職業を特殊視させ、時に誤解を招き、他方で深い魅力をたたえた医学分野にもしている。

産科医療、あるいは産科学の原点は分娩の補助であり、これは自然の生殖過程を見守り、

最低限の介入をおこなうことから始まった。しかし、医学の発展に伴い、その領域は時間をさかのぼりつつ発展していった。すなわち、妊娠後期での妊娠過程の管理と帝王切開を通じた介入、妊娠初期での胎児の診断とそれに基づく意思決定への介入と続き、さらに体外受精という新たな生殖システムが確立されるに及んで、生殖過程への介入へとより人間の始原へ向かう医療介入に挑戦してきた。現在、その最たるものとして、着床前診断が議論の俎上にあがっている。

着床前の生命である胚（受精卵）に対する医学は医学領域のなかでも、もっとも新参の分野であり、誕生してまだ、半世紀を経ていない。ところが、この胚という限られた数の細胞からなる生命の源は、ゲノム医療という観点から考えると、もっとも効率的にその遺伝情報を生かすことができる分野であり、今後、必然的に発展し、医学の趨勢を左右するゲノム医学の応用の中心的な領域になると考えられる。現在は着床前診断が医療応用の入り口にあるが、いずれはゲノム編集が医療行為としておこなわれることになると思像される。当然のことながら、これらにおける倫理的、社会的側面は医療の領域を超えて大きな議論を引き起こしつつある。そこには優生思想という古い概念とともに、SRHR (sexual and reproductive health and rights) という新しい倫理思想も加わって、ひとの存在の根源に関わる問題が提起されている。生まれたばかりの新しい生殖医療を異端児にしないために、われわれ産婦人科医は、あるいは医師は、社会は、どのように取り組んでいくべきなのか、何が本当にフェアな医療と言えるのか、産婦人科の立場から問題を提起し、産婦人科の未来をみなさまに考えていただきたい。

略 歴

万 代 昌 紀 (まんだい まさき)

【学歴・職歴】

昭和63 (1988) 年 3 月 24 日 京都大学医学部卒業、同附属病院産婦人科 研修医
平成元 (1989) 年 2 月 1 日 兵庫県立尼崎病院 医員
平成 4 (1992) 年 6 月 1 日 京都大学医学部附属病院産婦人科 医員
平成 8 (1996) 年 4 月 1 日 京都大学医学部附属病院産婦人科 助手
平成12 (2000) 年11月1日 米国国立衛生研究所 ワクチンリサーチセンター研究員
平成14 (2002) 年12月16日 京都大学医学部附属病院産婦人科 助手
平成19 (2007) 年 2 月 1 日 京都大学医学研究科婦人科学産科学分野 講師
平成25 (2013) 年 1 月 1 日 近畿大学医学部産科婦人科学教室 教授
平成29 (2017) 年 3 月 1 日 京都大学医学研究科婦人科学産科学分野 教授
令和 4 (2022) 年 4 月 1 日 京都大学医学部附属病院副院長

【学会役職】

日本産科婦人科学会常務理事・日本婦人科腫瘍学会副理事長・日本産婦人科内視鏡学会副理事長・婦人科悪性腫瘍研究機構 (JGOG) 副理事長・日本産婦人科手術学会理事長・日本癌治療学会理事・International Journal of Clinical Oncology (IJCO) 編集長・日本内視鏡外科学会理事・日本婦人科ロボット学会常務理事・日本エンドメトリオーシス学会理事・日本遺伝子診療学会理事・近畿産科婦人科学会理事